

ルカによる福音書20章「挑まれる方」

1A 「何の権威」か？ 1-8

2A 財産取りの殺人 9-18

3A カイザルはカイザルに 19-26

4A 復活の姿 27-40

5A ダビデの子キリスト 41-44

6A 人一倍厳しい裁き 45-47

本文

ルカによる福音書 20 章を開いてください。私たちは、イエス様が最後の週で、エルサレムに入城されたところに入っています。前回の学びを思い出しましょう、20 章は実際は 19 章 45 節からの続きなので、45 節から 48 節まで読んでみたいと思います。

19:45 宮にはいられたイエスは、商売人たちを追い出し始め、19:46 こう言われた。「『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巢にした。」19:47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長、律法学者、民のおもだった者たちは、イエスを殺そうとねらっていたが、19:48 どうしてよいかわからなかった。民衆がみな、熱心にイエスの話に耳を傾けていたからである。

イエス様がメシヤとして、キリストとしてエルサレムに入られました。そして初めに行われたのが、宮清めです。商売人たちを追い出されました。これが、当時の宗教指導者らの問題の根がありました。金銭を愛していた、ということです。そのことのために、彼らは神殿の秩序を保っていました。商売人によって自分たちのところに金銭が入ってくる制度を作っていたのです。

しかしイエス様は、メシヤとしてこれを清められたのです。実は旧約時代に、その最後の預言者マラキが、主が来られる時にすることは、まずは祭司職からなのだということを語っていたのです。「マラキ 3:1-4「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている。」と万軍の主は仰せられる。だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現われるとき立っていられよう。まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。この方は、銀を精練し、これをきよめる者として座に着き、レビの子らをきよめ、彼らを金のように、銀のように純粹にする。彼らは、主に、義のささげ物をささげる者となり、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日のように、ずっと前の年のように、主を喜ばせる。」

1 節にある「使者」とは、バプテスマのヨハネのことです。彼が主ご自身の道を整えました。悔い

改めを説きました。宗教指導者に対しても、「まむしの子らよ。だれが、あなたがたが神のさばきから免れると思っているのか。」と責めました。その彼が来て、そして主ご自身が突然、その神殿の来ると言っています。そして主が、神殿においてレビの子らを清める、つまり祭司たちを清めます。マラキの時代には既に、祭司職に不正や不義がありました。そして今、それが主イエスご自身によって行われたのです。

彼らが悔い改めれば、マラキの預言のように宮は清められたことでしょう。しかしそれをしませんでした。そして次に大事なのは、それでも彼らはイエスを捕えませんでした。いや、捕えられませんでした。民衆がイエス様の言葉に耳を傾けていて、その盛り上がりの中でイエスを捕えることは、自分たちを民衆の敵にすることです。宗教指導者にとって、自分たちの地位と財産が確保されていること、民衆に騒動が起こってその基盤が崩れることを最も恐れたのでした。

1A 「何の権威」か？ 1-8

20:1 イエスは宮で民衆を教え、福音を宣べ伝えておられたが、ある日、祭司長、律法学者たちが、長老たちといっしょにイエスに立ち向かって、20:2 イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。あなたにその権威を授けたのはだれですか。それを教えてください。」

主がメシヤとして行われたことは、すべて正しいことでした。それは、神殿を祈りの家とすること、であります。そして民衆に福音を宣べ伝えることでもあります。これらはキリスト教会においても同じであり、私たちが祈りの家になっているかどうか。そして、福音が宣べ伝えられているかどうか、が問われます。そこに、キリストの権威が賦与されます。御霊の力の現れがあります。けれども、人間的な見方をすれば、イエス様の行なわれたのは宗教管理局の意向に背いていることです。祭司長は、神殿のいけにえの制度について、主が商売人を追い出したことでその利益を著しく失い、律法学者は自分たちの解釈以上に、福音の真理を伝えていることによって、その権威に反発しているとみなしました。

20:3 そこで答えて言われた。「わたしも一言尋ねますから、それに答えなさい。20:4 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、人から出たのですか。」20:5 すると彼らは、こう言って、互いに論じ合った。「もし、天から、と言え、それならなぜ、彼を信じなかったか、と言うだろう。20:6 しかし、もし、人から、と言え、民衆がみなで私たちを石で打ち殺すだろう。ヨハネを預言者と信じているのだから。」

これで、どちらが神殿において主になっているかが、明らかになっていますね。権威者としてイエスに近づいた彼らが、むしろイエスの権威の前で答えられなくなっています。先ほど引用したマラキ書に、バプテスマのヨハネについての預言がありました。そして事実、ヨハネが悔い改めのバプテスマを説き、人々を神の国の到来の備えをさせました。彼は確かに、天から来たものであり、勝手に自分が宗教的権威を振りかざしているわけではありません。そして民衆も、数多くの人が彼から

バプテスマを受けました。これが、神の国の到来の前触れであり、その権威と力が現われていたのです。

しかし、宗教指導者らはヨハネの説教に応答しませんでした。それは、彼があからさまに、指導者たちの悪事を明らかにして、悔い改めるように言ったことがあります。そしてもう一つは、主イエスご自身がヨハネと同じ、天の御国と悔い改めを説かれていたからです。イエス様はヨハネの延長の預言者であられました。さらに、ヨハネはイエス様こそが、来るべき方、メシヤであることを指示していました。したがって、ヨハネを認めることはイエスを認めることになるわけで、彼らは承服できなかったのです。

20:7 そこで、「どこからか知りません。」と答えた。20:8 するとイエスは、「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい。」と言われた。

宗教指導者たちは、官僚的な返答をしましたね。どこからの権威か答えずに、「知りません」と答えました。しかし、天からの啓示、福音の真理というのは、信じるか拒むかの二つしかないのです。知りませんという言葉は、拒んでいるということと同じです。真理に向き合っていないのです。イエス様も、「あなたがたに話すまい」と答えておられます。真理が示されて自分の心を探るのではなく、心を頑なにしたままで返答しなければ、神も沈黙を保ちます。自分が主から語られないと思っているなら、まず自分自身が心を探り、主に対して、また人に対して心を開き、語っているかどうかを調べないといけません。

2A 財産取りの殺人 9-18

20:9 また、イエスは、民衆にこのようなたとえを話された。「ある人がぶどう園を造り、それを農夫たちに貸して、長い旅に出た。20:10 そして季節になったので、ぶどう園の収穫の分けまえをもらうために、農夫たちのところへひとりのしもべを遣わした。ところが、農夫たちは、そのしもべを袋だたきにし、何も持たせないで送り帰した。20:11 そこで、別のしもべを遣わしたが、彼らは、そのしもべも袋だたきにし、はずかしめたうえで、何も持たせないで送り帰した。20:12 彼はさらに三人目のしもべをやったが、彼らは、このしもべにも傷を負わせて追い出した。

イエス様は民衆に語っておられます。ぶどう園は、旧約聖書の中でしばしば、イスラエルの国そのものを指しています。イザヤ書5章において、主なる神ご自身が農夫でぶどう園はイスラエルです。そこに肥しを入れ、丁寧に育てたのに酸いぶどうができてしまった、とあります。それは主子の民を選ばれたのが正義を行なうためだったのに、流血が出てしまった。正義や平和、善意などの良い実ではなく、流血、不正、虐げ、偶像礼拝などの悪い実ができてしまった、ということです。

しかしここでは、農夫たちは祭司などの指導者たちのことを指しています。主人である神が、イスラエルの民からの実を受け取ろうとされて、それで僕を遣わされます。彼らはもちろん、預言者

のことです。農夫たちは袋叩きにして、追い返しました。これは、当時のイスラエルの民が、そして祭司や王たちなど頭となっている者たちが、神からの預言者を拒み、迫害したことを指しています。一度ならず、二度、そして三度、僕を主人は遣わしています。これは神の忍耐を示しています。神が、何度となく預言者を遣わし、イスラエルの民がそれを拒んでも、それでも預言者を遣わされました。

20:13 ぶどう園の主人は言った。『どうしたものか。よし、愛する息子を送ろう。彼らも、この子はたぶん敬ってくれるだろう。』20:14 ところが、農夫たちはその息子を見て、議論しながら言った。『あれはあと取りだ。あれを殺そうではないか。そうすれば、財産はこちらのものだ。』20:15 そして、彼をぶどう園の外に追い出して、殺してしまった。こうなると、ぶどう園の主人は、どうするでしょう。20:16 彼は戻って来て、この農夫どもを打ち滅ぼし、ぶどう園をほかの人たちに与えてしまいます。」これを聞いた民衆は、「そんなことがあってはなりません。」と言った。

ここで主ははっきりと、ご自身とこれまでの預言者とを区別しておられます。預言者は神の僕でありましたが、ご自身は神ご自身の子、御子であります。「ヘブル 1:1-2 神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。」

そして指導者たちの動機を見てください。「そうすれば、財産はこちらのものだ。」というものです。彼らの経済的利益、その地域の確保がイエスを殺した動機なのだということをよく表しています。宗教指導者は、あくまでも神の家を管理する者であり、その所有者ではありませんでした。しかし、管理をしている中で自分たちのものとするのが、当然の権利だとみなしていったのです。全てが失われても構わない、あるいは、与えられていることが神の恵みであるを知って、感謝するということがなければ、その時は宗教指導者と同じ過ちを犯していることになります。

そして、主人は農夫を滅ぼして、他の人たちにぶどう園を与えてしまいます。これは、イスラエルの国民ではない人々、すなわち異邦人たちに渡します。もちろん、主を受け入れたユダヤ人の弟子たちは追い出されることはありませんが、イスラエルは国民としてメシヤを受け入れる機会を逸しました。それで、世界中に今、イスラエルのメシヤであるイエスを異邦人たちが受け入れるようになっています。

ここで民衆は、「そんなことがあってはなりません。」と叫んでいます。これは、どうしてでしょうか？一つは、農夫たちが僕たちを袋叩きにして、そして主人の息子を殺してしまうということ。農夫がそんなことをしてよいものか、という叫びでしょう。そして次に、他の人たちに渡してしまうというのもショックだったに違いありません。しかしイエス様はこれが現実だと言われるのです。

20:17 イエスは、彼らを見つめて言われた。「では、『家を建てる者たちの見捨てた石、それが礎の石となった。』と書いてあるのは、何のことでしょう。20:18 この石の上に落ちれば、だれでも粉々に砕け、またこの石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛び散らしてしまうのです。」

詩篇 118 篇にある、ハレル詩篇です。113 篇から 118 篇までは、ハレル詩篇と呼ばれて、過越の祭りなどで歌いますが、彼らがまさに過越の祭りを祝っていて、そしてエルサレムにイエス様が入城される時も、「ホサナ」と叫んだのは 118 篇の言葉からです。そのホサナの手前に、この言葉が書かれているのです。これはショックです、家を建てる者がその礎石を捨ててしまうのですから、あってはならぬことなのです。しかし、それが神の主権の中で起こるというのが、預言が告げていることであります。

そして、この捨てられた石が、人々を裁く石となります。人々がこの石によって粉々に砕けますが、ダニエル書 2 章には、人手に抛らずに切り出された石が、人の像の足の部分にぶつかり、その像が粉々になってのち、大きな山となったという夢があります。すなわち、これはキリストご自身のことです。キリストを拒む者たち、見捨てる者たちが家を建てる者、宗教指導者たちであり、そしてキリストによって彼らは粉々に砕かれるという裁きの宣言をしておられるのです。

ここで、石の上に落ちると、石がその人の上に落ちるとのでは、若干の違いがありますね。上に落ちるほうが、ただ粉々に砕けるだけですが、石がその人の上に落ちると、飛び散ってしまいます。これは、キリストの前で心砕かれるのか、それとも拒むことによって容赦なく裁かれるのかの違いです。今、心砕かれて、罪を悲しみ、そして神の憐れみを受ければ救われるのです。けれども拒むのであれば、神の怒りが臨みます。事実、ユダヤ人宗教指導者は紀元 70 年に、ローマによってその神殿が破壊されることによって神の裁きを受けます。

3A カイザルはカイザルに 19-26

20:19 律法学者、祭司長たちは、イエスが自分たちをさしてこのたとえを話されたと気づいたので、この際イエスに手をかけて捕えようとしたが、やはり民衆を恐れた。20:20 さて、機会をねらっていた彼らは、義人を装った間者を送り、イエスのことばを取り上げて、総督の支配と権威にイエスを引き渡そう、と計った。

1 節では、祭司長と律法学者が、長老たちと一緒にイエス様のところにやってきたとありますが、ここでは律法学者が先に来ている。恐らく、律法学者は律法に精通していたので、イエス様の譬えが聖書からのものであることをすぐに気づいたのでしょう。彼らは自分たちの権威でイエスを捕えることはできないと悟り、ローマの権威によって捕まえてもらおうと考えました。当時は、ユダヤ人の自治は認められていましたが、主権は飽くまでもローマであり、死刑の権威もローマだけが持っていました。

20:21 その間者たちは、イエスに質問して言った。「先生。私たちは、あなたがお話しになり、お教えになることは正しく、またあなたは分け隔てなどせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。20:22 ところで、私たちが、カイザルに税金を納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」

この間者たちは、へつらいの言葉を使っています。イエス様の語られることは正しく、分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるとほめています。事実、イエス様は人の目をはばかれず、真理を教えておられました。しかしこうやって、人の自惚れる肉を喜ばせる言葉を語り、それで相手を言葉に罠に陥れようとしています。

カイザルはローマ皇帝のことです。当時のユダヤ人は、ローマの圧政に苦しめられていました。ユダヤ人は反乱を起こしたいと思う者たちが散発的に現われており、例えば、ピラトがガリラヤ出身のユダヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちの捧げるいけにえに混ぜたという見せしめを行ないました(13:1)。そして、税金というのは彼らにとって異邦人に屈服する象徴であり、それで酷く嫌っていたのです。前回、ザアカイについて学びましたが、取税人がどうして嫌われていたのか想像できますね。

それでどちらに答えても、イエス様を陥れる選択肢を与えたのです。律法に適っているのか、それとも適っていないのか、この二者選択を与えたのです。もし律法に適っていると答えるのであれば、イエス様は瞬間に民衆の人気を失います。ユダヤ人はローマへの納税を憎んでいたからです。けれども、適っていないと答えるのであれば、ローマの法律に違反することを教えているとして、ローマ当局にイエスの身を引き渡すだけです。どちらにしても、イエス様を不利に陥れることができました。

ところで、イエス様はいろいろな側面から、挑戦を受けておられます。初めは、人格的攻撃でした。「あなたには、そんな権威があるのか？その権威はどこから来たのか。」という挑戦でした。公の教育機関を卒業せず、公式なルートで権威を受けていないのに、どうしてそんなことをしているのかという問いかけは、キリスト教会の中でも受けます。次に、ここでは政治的な挑戦です。政治というのは、ここにあるようにどちら側かに人を付ける、党派性を持っています。与党でなければ野党です。あるいは政府と同じ見解を持っていると、学者であれば「あなたは御用学者ですね。」とレッテルを貼られます。

20:23 イエスはそのたくらみを見抜いて彼らに言われた。20:24 「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」彼らは、「カイザルのです。」と言った。20:25 すると彼らに言われた。「では、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」20:26 彼らは、民衆の前でイエスのことばじりをつかむことができず、お答えに驚嘆して黙ってしまった。

イエス様は驚くような回答をしたと言われます。カイザルの銘があるから、カイザルに返しなさいというのはユーモアがありますが、ここで彼らが驚いたのは、二者選択であるはずの問いかけに対してそうではない、第三の回答を与えられたからです。神とカイザルは相反するものではなく、神に仕えることは、世俗の権威を超越しているということです。

このようなことを、「政教分離」と言います。私たちキリスト者は、神の国の市民であり、神に仕える者たちです。しかし、世俗の権利すなわち日本政府であったり、行政機関が不信者であるからといって、聖書に従わないからといって、それに反抗するものではありません。その権威は神から来たものであるから、神に従うという良心で、それらの権威にも従うのです。それでも従わないという時があります。それは、神の命じられたことに真っ向から反対する命令を世俗の権威が命じる時です。ローマ支配下のクリスチャンたちも、カイザルの神格化を強要された時は、カイザルが主であるということを拒み、それで殉教しました。しかし、その他の事柄についてはこれらの権威も神から来たものとして従うのです。私たちの信じる神の国は、この世のものではありません。そしてこの世にある権威は、神の許しなしには立てられていないのです。

4A 復活の姿 27-40

20:27 ところが、復活があることを否定するサドカイ人のある者たちが、イエスのところに来て、質問して、20:28 こう言った。「先生。モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が妻をめぐって死に、しかも子がなかったらあいは、その弟はその女を妻にして、兄のための子をもうけなければならない。』20:29 ところで、七人の兄弟がいました。長男は妻をめぐりましたが、子どもがなくて死にました。20:30 次男も、20:31 三男もその女をめぐり、七人とも同じようにして、子どもを残さず死にました。20:32 あとで、その女も死にました。20:33 すると復活の際、その女はだれの妻になるでしょうか。七人ともその女を妻としたのですが。」

当時のユダヤ教の中には、律法に厳密になろうとするパリサイ派の他に、神殿礼拝の管理者であったサドカイ派がいました。彼らは、律法に書かれていること以上に神殿で礼拝を捧げることが守られることを願っていたので、世俗のローマとも現実的に対処して、合理的に動こうとしたグループです。一番、権威を持っていました。けれども、彼らは聖書に対して合理主義でした。復活のような奇蹟、御使いなどの目に見えないことは信じない合理主義者だったのです。彼らの信じているのは、モーセ五書、創世記から申命記までです。

ここで仮定としてあげていることは、申命記に出てくる律法です。子孫を残すために、弟がその義務を負わなければなりません。実は、律法が成立するまえから慣習として存在していました。ユダの子のオナンは、長男エリが死んだので、妻のタマルと結婚しなければなくなりました。けれども、オナンはそれを嫌がって、精子を地に流したので、主の怒りを買って、殺されました。そして、モーセによってそれが律法として神が定められたのです。ですから、サドカイ派の人は復活を信じたら、一人の女に七人の男が夫になることになるが、それは律法であってはならないことだと言って、そ

の非合理性を突いたのです。

20:34 イエスは彼らに言われた。「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、20:35 次の世にはいるのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません。20:36 彼らはもう死ぬことができないからです。彼らは御使いのようであり、また、復活の子として神の子どもだからです。

イエスは、復活のからだと地上のからだは性質上異なることを指摘されています。聖書によれば、私たちは変えられるのであり、このからだは地のちりによって造られたが、復活のからだは天にあるものによって造られると述べられています(1コリント 15 章参照)。御使いのようになっているので、めとったり、とついだりはしません。

20:37 それに、死人がよみがえることについては、モーセも柴の個所で、主を、『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神。』と呼んで、このことを示しました。20:38 神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。というのは、神に対しては、みなが生きているからです。」

これは出エジプト記から来るものです。イエスは、彼らが信じているモーセ五書から復活を証明されました。アブラハムもイサクもヤコブも、生きているという前提で、神はご自分をそう呼ばれました。ゆえに、復活を前提にして語っておられるのです。復活については、ダニエル 12 章 2 節に明確に、約束が書いてありますが、サドカイ人は預言書を信じないので、モーセ五書に復活の証拠があることを示されたのです。

このようにしてイエス様は、神学的な挑戦を受けられました。神学的な違いも人々を二極化させます。これが正しければ、そうでないものは正しくなくなります。そうした神学的対立も主は、知恵をもって対処されたのです。

20:39 律法学者のうちのある者たちが答えて、「先生。りっぱなお答えです。」と言った。20:40 彼らはもうそれ以上何も質問する勇気がなかった。

見て下さい、パリサイ人もサドカイ人も、イエスを言葉のわなに落とし入れようとしていましたが、今、どちらもイエスの言葉に惹きこまれてしまっています。

5A ダビデの子キリスト 41-44

20:41 すると、イエスが彼らに言われた。「どうして人々は、キリストをダビデの子と言うのですか。20:42 ダビデ自身が詩篇の中でこう言っています。『主は私の主に言われた。20:43 「わたしが、あなたの敵をあなたの足台とする時まで、わたしの右の座に着いていなさい。』」20:44 こういうわけで、ダビデがキリストを主と呼んでいるのに、どうしてキリストがダビデの子でしょう。」

主は本質的なところに、入られました。主が復活をしっかりと論証されて、それからキリスト論に持って行かれます。これこそが、最も大事なところ。イエス様のほうから彼らに尋ねられました。彼らは族長社会の中におり、父を子どもや子孫は「主」と呼んでいました。けれども、ここでは、父が子を「主」と呼んでいます。こんなことは、決してありえないことです。だから、彼らは答えることができませんでした。また、自分の子であるのになぜ、生まれてもないキリストを主と呼べるのでしょうか？つまり、ダビデよりも先に存在する方であればいけません。ここに神性があるのです。主であり、神に属する方がキリストだということです。

私たちにも、このような挑戦があります。この世において、私たちの信仰を説明させられる場面があります。しかし、大事なものは知恵に満ちたキリストご自身につながっているということです。私たちはこの世に支配されているようで、実はキリストがこの世を支配しておられるのですから、この方につながることによって、私たちも世に対する勝利を持つことができます。「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしないでなさい。ペテロの手紙第一 3:15」

6A 人一倍厳しい裁き 45-47

20:45 また、民衆がみな耳を傾けているときに、イエスは弟子たちにこう言われた。20:46 「律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが好きで、また会堂の上席や宴会の上座が好きです。20:47 また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです。」

これが、彼らの権威の露呈です。初めに挑みかかった、誰の権威によってと彼らが言ったのは、このような、人に良く見られたい、そしてやもめの家を食いつぶすような貪欲、このようなものを守るための秩序だったのです。しかし、弟子たちはこのような権威に頼り頼んではいけません。イエスを主とするのです。したがって、イエスを主人としているのですから、自ずとこうした悪から離れて、主の側に付くのです。